様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 28 日現在

機関番号：32643
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2012
課題番号：23720147
研究課題名（和文）英国大戦間期の主体構築研究
——女性作家による戦争自伝伝記文学作品の考察
研究課題名（英文）A Study on Self-Formation during the British Interwar Period

研究代表者
松永　典子（MATSUNAGA NORIKO）
帝京大学・理工学部・講師
研究者番号：00579807

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、２０世紀初頭の英国での自己表象をめぐる過程を、「審美的」文学の文脈（モダニズム）と歴史的文脈（大戦間期）とを接続したうえで、同時期の自伝的テキストの調査、収集、および分析を通じて検証することにある。本研究では、正典とされる作品とともに、非正典とされてきた作品を論じる。それは両者の区分ではなく共通点に注目するからであり、両者をともに論じることで、女たちの自己表象モデルを多角的に捉えることを目指した。とくに英国にとってナショナルな第一次大戦に関連する作品を中心に、ジェンダー／セクシュアリティ理論に基づき考察する。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to analyze self-formation in twentieth-century Britain by examining (auto-) biographical texts in the contexts of aesthetic literature (Modernism) and history (interwar period), using the insights of recent gender/sexuality studies. The research tries to re-examine not only “canonical” but also “noncanonical” works in order to undertake an analysis of the ideological apparatuses of self-formation as well as of women’s experiences.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：ジェンダー、暴力、主体、性的差異

１．研究開始当初の背景

9.11 事件を経験した今日、戦争は、フランスの思想家 Paul Virilio が「新しい戦争」と呼ぶような、敵の姿も前線も分からぬまま損害だけを目にする形態になったといわれる。その新しさが与える影響は、現代の戦争だけに留まらない。例えば第一次大戦開始後一世紀近く経とうする 2007 年の英国で、逃亡罪で銃殺された第一次大戦の従軍兵士の恩赦がなされたように、戦争観の変化は、過去の戦争の読みなおしを求めている。

こうした動向に加えてジェンダー／セクシュアリティの視点からも、戦争およびミリタリズムの読み直しがおこなわれている。Cynthia Enloe は、武器、戦争、軍事支出などの軍事史や軍事表象のなかに女たちが記録されていなくとも、軍隊は女たちに依存しているし、さらにはその事実を隠そうとしていると指摘する。Enloe のような研究者は、兵士の妻、軍隊売春婦、従軍看護婦、女性兵士、軍事産業の女性労働者の経験の分析を通じて、過去および現在の軍隊政策決定者たちがいかに女たちを利用してきたかということを明らかにした。

一方、英文学研究においては、英国モダニズム文学を大戦の観点から分析する研究が

近年、盛んである。とくに戦争という国家的暴力ゆえに空間的移動を強いられた者たちの証言に注目が集まり、戦争体験を記録した自伝および伝記への関心が著しい。こうした文学テキストはライフ・ライティングと呼ばれる。ライフ・ライティングとは英語圏文学において近年使われるようになった用語で、一般的に正典文学と呼ばれる自伝や伝記作品に対して、回想録・手記・証言記録など「マイナー」なテキストを指す総称である。ライフ・ライティングというジャンルの登場によって、それまで「人間」――記録されるにふさわしい一級市民――として承認されてこなかった者の経験を可視化させることが容易になったといえよう。そのためライフ・ライティング研究は、正典と非正典との区別に異議を唱えてきたポストコロニアリズムやフェミニズム批評に広がっていった。こうした研究の代表として中井亜佐子の『他者の自伝』が挙げられる。

上記のような研究動向のうえに、これまで研究代表者は、大戦間期の自伝的文学作品およびそれらをめぐる議論とは、植民地帝国から「民主的」国民国家へと移行する時代の主体構築の議論であり、戦争とは国家による「国民」構築の暴力だと考え、文学作品をとおして「民主的主体」を批判的に研究し、大戦間期文学(T. E. Lawrence の *Seven Pillars of Wisdom* や Radclyffe Hall の *The Well of Loneliness* などの大戦小説）を人種・性・ジェンダーの観点から分析し、民主主義的近代主体のなかに暴力が囲い込まれ、それが帝国主義と近代的性差別の枠組みのなかで、巧妙に正当化されていることをみてきた。

その結果、過去の大戦（間）期文学研究では、「戦争詩人」と称される志願兵分析が伝統的に主流となっていたが、近年の歴史文学文化研究によって志願兵が従軍者の主流だったというのは神話でしかなかったことが指摘され、それゆえ男性兵士作品およびその表象の読み直しが進んでいる。しかしながら、女性従軍者に関する研究は十分に進んでいるとは言い難いこと、そして帝国主義および性配置が時代とともに変化したのに、政治的日常的に猛威を振るう暴力については十分に研究がなされたとはいえない、ということを認識した。それゆえ「性的差異」との連動性の有無を含めてグローバル空間で構築されていく近代的市民主体の構築過程を考察することが課題と考え、本研究課題を実施するに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、２０世紀初頭の英国文学における自己表象をめぐる構築過程を、いわゆるモダニズムという文学史的文脈と大戦間期という歴史的文脈とを接続したうえで、同時期の自伝的テキストの調査、収集、および分析を通じて検証することにあった。本研究では、ややもすると審美的かつ非政治的な文学とされたモダニズム期の文学を多角的にとらえるため、戦争という暴力をキーワードによってとらえなおすことによって、キャノンとされる作品とともに、これまで「大衆的」もしくは「文学的ではない」といった評価のために顧みられることがあまりなかった作品を同時に論じる。それは両者の区分ではなく共通点に注目するからであり、両者をともに論じることで、女たちの自己表象モデルを一枚岩ではなく多面的にとらえることを目指したからである。ジェンダー体制を利用しながら振るわれる戦争という暴力をとおして、二〇世紀初頭の英国の「人間」の領域がいかに画定されるのかを、近年のジェンダー／セクシュアリティ研究に基づいて明らかにした。とくに、選挙権を得ることによって「市民」として新たな権利を獲得した英国女性に注目し、第一次大戦の従軍経験を描いた英語圏の女性作家による自伝的小説作品を研究対象とし、性的差異と連動しながら構築される近代的主体とその構築過程を分析した。

３．研究の方法

(1)先行研究

第一次世界大戦の先行研究を、伝記の観点から整理することで、大戦言説の問題点および盲点を明確にした。まず Paul Fussell や Samuel Hynes などによる男性従軍者をおもに分析した歴史的文化的研究成果を参考にしつつ、大戦期の定期刊行物に描かれる女性従軍者の戦争体験者の言説および視覚表象の資料を収集し、大戦期と大戦間期との経年による変化を分類化した。

同時に、Virginia Woolf や H. Nicolson ら同時代の伝記理論家たちによる、自伝および伝記文学を、大戦前後に活発となったフェミニズムの文脈に接続させて考察した。そうすることで、大戦間期の英国フェミニズム文学および文化の歴史的相対化をおこなうことも、研究の射程に入れることが可能になると考えた。

これと並行して、大戦間期に関する研究論文を定期的に読み、英米の研究水準を意識しながら研究を進めるように努めた。

(2)資料調査

2011年度から2年間という限られた研究期間ではあるが、作品発表当時の出版状況を把握するために、可能な限り英国ロンドンにある大英図書館もしくは帝国戦争博物館にて、大戦間期の文学作品の現物を読むように努

めた。日本での研究においては、出来る限り現物を入手もしくは（必要な場合には）購入した。

当初の予定では 2011 年度、2012 年度ともに渡英調査をおこなう予定であったが、2011 年の震災後の影響によって予定の変更を余儀なくされた。ただし、必要な文献に関しては、勤務先機関の図書館の協力を得て取り寄せて代替措置を取った。

とくに資料収集において力を入れたのが、女性作家による自伝／伝記小説の分析である。大戦期における文学的表象を確認するために、大戦中の女性従軍者の代表的職業に従事した従軍看護婦および救急車女性運転手経験者の自伝的文学作品の検証をおこなった。大戦中に発表された Ellen La Motte の *The Backwash of War*(1916)、 Mary Borden の *The Forbidden Zone*(1929)、Helen Zenna Smith の *Not So Quiet*…(1930)、Irene Rathbone の *We That Were Young*(1936)といった、実際に従軍経験者の記録およびその記録をもとに作品を執筆した作家の作品を比較検討し、経年による変化を分析した。

資料収集と間接的に関連する事柄として、研究者との交流にも努めた。研究動向をできるだけ広く知るため、また若手研究者として幅広く研鑽を積むことが肝要と考えたので、国内だけでなく国外での学会に可能なかぎり参加し、可能ならば研究発表をおこない、同分野の研究者との交流の機会を得て意見交換するように心がけた。

(3)成果発表

成果については、国内外の学会および研究会にて研究発表するとともに、学術誌に発表した。詳細については、事項にて説明する。

４．研究成果

研究成果については、(1)英国大戦間期におけるジャンヌ・ダルク表象研究、(2)従軍女性研究、(3)Just Jane シリーズ研究、の三つに分けて概要を記述する。

(1) 英国大戦間期におけるジャンヌ・ダルク表象研究――女性参政権運動・人種・親族関係

ジャンヌ・ダルクは、中世の英仏間において争われた百年戦争末期に、神託を受けたと主張し、突如現れた歴史上の人物であると同時に、現在のフランス・ナショナリズムのヒロインでもある。ナショナリズムと親和性の高いジャンヌ表象は、20 世紀の世紀転換期および初頭の英国においても受容された。古くは William Shakespeare の *Henry VI* や Tomas de Quincy などの英文学において取り上げられてきたジャンヌであるが、世紀末には児童文学作品として Andrew Lang の *The Story of Joan of Arc*(1906)などでも取り上げられた。これはジャンヌがカトリック教会によって 1909 年に列福され、1920 年に列聖されたのち、聖人ジャンヌとなり、名誉が回復されたことが背景にあると考えられる。実際、ジャンヌを題材にした作品は英語圏だけでなくアジア圏でも発表されている。しかしジャンヌが国家のために戦った敵国の英国において取り上げられた点は他国とは異なる特徴を持っていると考えられる。

英文学作品に描かれたジャンヌ像を見ると、当時の英国女性像（とくに女性参政権運動家たち）と重ねられて描かれている点に注目し、英国におけるジャンヌ像を人種・性・ジェンダーの境界を攪乱する表象として分析した。

これに関する研究成果については、口頭発表をおこなった。また現在、論文として執筆中である。

(2) 従軍女性研究――看護婦表象

大戦が女性の自己表象に変化をもたらした一つの理由は、彼女たちに労働という新たな役割をもたらしたことが挙げられるが、同時にその役割は女と女の関係性にも変化をもたらしたといえる。第一次大戦の労働女性の代表として看護婦表象を分析したところ、制度としての看護婦の確立期にあった、いわば職業（プロ）看護婦と、救急看護奉仕隊(Voluntary Aid Detachment, VAD)に所属する素人看護婦に関する言説がきわめて混乱していることを、当時の資料から確認した。本成果については、”Health and Illness in Culture”の国際学会にて口頭発表をおこなった。

他方、戦中の従軍女性の表象をより多角的に捉え比較検討するために、英国以外の従軍女性についての研究にも取り組んだ。具体的には日本人で日本軍の従軍「慰安」婦の数少ない証言者の一人である城田すず子の自伝／伝記『マリヤの賛歌』の一部を英語に翻訳するとともに、内容を紹介した。

(3) Just Jane シリーズ研究――フェミニズム運動のその後

成人女性の主体構築の過程を考察する一方で、大戦間期の女性表象におけるフェミニズム運動の影響を考えるとともに、第三波フェミニズムおよびポスト・フェミニズムというフェミニズムのあり方に論争が起こっている現在を踏まえ、世代間におけるフェミニズム受容の可能性を、Evadne Price の大衆児童文学シリーズのうち *Just Jane*(1928)の主人公の女児を取り上げて分析した。中産階級を描く群像小説でもある本作品のなかには、戦争経験者もしくは戦争の影響を受けた登場人物が多数描かれたことを資料から提示

し、そうした登場人物のうち女性人物がフェミニズム運動との関わりが深いことを指摘し、フェミニズムの継承を描いた作品として考察した。

本研究課題で知見を得たジェンダー／セクシュアリティ理論については、他分野の研究会にてコメンテーターを務めることで成果を還元した。具体的には、2012年度第2回「イスラームとジェンダー」研究会（2013年12月15日）にて、イスラーム研究におけるジェンダー視点の可能性および重要性について論じた鳥山純子による報告「中東研究におけるジェンダー学の可能性――『ジェンダートラブル』と『オリエンタリズム』の親和性を切り口に」にて応答役を務めた。ここで英語圏におけるジェンダー／フェミニズム研究の現在と、それに関連する用語の説明などをおこなった。本研究の一端を、近接する他分野の研究者と共有することで、今回の研究成果の一部を社会に還元できたのではないかと考えている。

これまでに述べた研究成果はすべて、科学研究費助成金によって達成可能となったことは間違いない。こうした機会を与えていただいたことを深く感謝している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① Noriko MATSUNAGA. “Girls’ Feminism in the British Interwar Period: Evadne Price’s *Just Jane*” （査読無）*Annual Report of the Humanities* vol.18 (2012): 1-19.
② Noriko MATSUNAGA. “Introducing Japanese Literature: Shirota Suzuko’s *Mary’s Song of Praise*” （査読無）*New Perspective* vol.194 (2011): n/a.

〔学会発表〕（計３件）

① Noriko MATSUNAGA. “Nursing Culture during the Interwar Period in Britain” Health and Illness in Culture Conference hosted by Center for the Study of Languages and Cultures, Taipei Medical University(Taipei, Taiwan, 2012年12月20-21日).
② 松永典子「大戦間期英国のジャンヌ・ダルク表象：G.B.ショー『聖ジョーン』」早稲田大学ジェンダー研究所月例研究会、早稲田大学(2012年3月31日)
③ Noriko MATSUNAGA. “The Representation of Joan of Arc during the British Interwar Period: Suffragettes’ Movement” The 10th Annual Hawaii International Conference on Arts and Humanities (Honolulu, USA, 2012年1月14日)

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
松永　典子（MATSUNAGA NORIKO）
帝京大学・理工学部・講師
研究者番号：00579807

(2)研究分担者
なし（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし（　　）

研究者番号：